医学と生物学（Medicine and Biology）　Vol. 159 (1): i1_Rj01

［総説］

緒方洪庵について

檜山哲夫[1]、荒尾進介[1]

[1] バイオテクノロジー標準化支援協会

要旨

1942 年に「医学と生物学」を創刊した緒方富雄博士（1901-1989）の曽祖父で、蘭法医、蘭学者、教育者であった緒方洪庵（1810-1863）の生涯を簡単にまとめた。

キーワード：緒方洪庵、緒方富雄、適塾、種痘、蘭法医、蘭学者

緒方洪庵は、足守藩士佐伯瀬左衛門惟因の三男として、文化７年(1810)７月に生まれた。

１６歳で元服して田上駻之助（せいのすけ)、後に惟彰となる。文政８年（1825）惟彰は藩大阪蔵屋敷を買い取る交渉に出る父親の惟因に従って初めて賑やかな大阪の町を見た。交渉は成立して８月に足守に帰ったがその年の秋、父親の惟因が藩の大阪留守居役になり、再び惟彰（緒方洪庵）を伴って大阪に出た。そこで惟彰は文武に励んだものの病弱のために武士をあきらめ、医学の道に進むことにし翌文政９年７月から中天游の塾「思々斎塾」で西洋医学と窮理学（物理学）を学んだ。この時から緒方三平を名乗るようになる。文政１１年（1828）足守に帰り、藩から正式に思々斎塾入学の許可を得、再び大阪に出て思々斎塾で学び、そこにある翻訳書のほとんどを読破する。天保２年（1831）２月、天游の勧めにより江戸へ出て蘭方医坪井信道の『安懐堂塾』に入門してオランダ語と医学を学ぶ。天保３年１２月洪庵はここで人体生理学書を翻訳、『人身窮理学小解』と名づけた。この本はその後３０年にわたり多くの人々に流布した。更に数十巻の原書を読破し、『卵巣水腫紀事』など約十篇の翻訳書を著した。天保６年（1835）足守に帰った直後の３月、恩師中天遊の死去を知り４月には大坂に出て師の恩に報いるため思々斎塾で教鞭をとる。天保７年（1836）には中天遊の嗣子耕介を伴い思々斎塾の先輩摂州有馬の医師億川百記の資金援助もあり長崎に遊学した。この頃から緒方洪庵を名乗る（２７歳)。

長崎遊学中には洪庵は医師の看板を掲げオランダ商館長のニーマンに会ったり「袖珍内外方叢」（薬剤処方）を翻訳した。

２年後の天保９年(1838)1 月には大坂に戻り瓦町で医者を開業するとともに蘭学塾「適々斎塾（適塾)」を始めた。同年１０月洪庵 29 歳で億川百記の娘八重（17 歳）と結婚した。洪庵は開業２年目には早くも浪花医者番付で東の前頭四枚目になり、ついで最高位の大関になった。７年後の弘化２年（1845）には、入門者も多くなり手狭になったため、過書町に町家を購入して移転し、以後約二十年間ここを根拠として日本最初の病理学書「病学通論」や、コレラの病理治療予防法を書いた「虎狼痢治準」、ドイツの著名な医学者フーフェランドが５０年間医療に携わった経験をまとめた「扶氏経験遺訓」などを著わした。洪庵の名声は高く全国から俊秀が集まり、移転

連絡先：
E-mail: thiyama@athena.ocn.ne.jp
[1] 〒 173-0005 東京都板橋区仲宿 44-2

2019 年 2 月 25 日受付
2019 年 4 月 1 日受理

後の塾内寄宿門人は 637 名を数える（『姓名録　適々斎』日本学士院）。外塾生をあわせると 2000 人とも 3000 人ともいわれる。おもな塾生には、大村益次郎、福沢諭吉、佐野常民、橋本左内、大鳥圭介、長与専斎などがいる。

森　林太郎（鴎外）による顕彰碑
（高林寺洪庵墓所）

洪庵の功績でもうひとつ特筆すべきは種痘の導入である。嘉永２年（1849）牛痘苗が輸入されて京都に到着した際、越前藩医笠原白翁に分与を請い大坂に除痘館を設け種痘を行い、予防に貢献、その記録として「除痘館記録」がある（下記参照）。

文久２年（1862）、洪庵は奥医師兼西洋医学所頭取として江戸に召し出され、強く辞退するも断りきれず、江戸に下るが、わずか１０ヶ月後の文久３年（1863）６月１０日、江戸の西洋医学所頭取屋敷において多量の喀血により急死。享年５４歳。江戸駒込高林寺に葬られた。

洪庵らの仕事は下記サイトに詳しい。

http://blog.livedoor.jp/shihobe505/archives/34737899.html

緒方洪庵は、八重との間に七男六女を持つ。良妻賢母の八重は適塾生に慕われ、明治 19 年 65 歳で亡くなったとき葬儀には政財界の名士をはじめ２千人もの参列者があった。

江戸駒込高林寺の洪庵墓所
（東京都文京区）

嫡子の緒方惟準は、ポンペやボードインに学んで医師となり、明治天皇の侍医として宮廷医療に西洋医学を導入し、浪華仮病院（適塾の系譜を継ぐ大阪大学医学部の前身）や軍医学校の創設、大阪の医療体制整備などに活躍し明治の医学界で重きをなした。その後も緒方洪庵の子孫の多くは医学で名を成し現在まで続いている。孫の緒方知三郎（洪庵次男の緒方準の四男）は東京帝国大学医科大学（東京大学医学部）を出て東京医科大学初代学長に就任、弟の緒方章は高名な薬学者で東京帝国大学医学部教授・日本薬学会会頭・日本薬剤師協会会長などを歴任した。

洪庵の曾孫緒方富雄は血清学の権威で東京大学医学部教授を務め財団法人緒方医学化学研究所を設立、「医学と生物学」誌を創刊した。

OGATA KOAN, One of the Most Outstanding Physician, Scholar and Educator in the Mid 19th Century Japan

Tetsuo Hiyama[1] and Shinsuke Arao[1]

[1]Supporting Association for Biotechnology Standardization (SABS)

Summary

A brief biography of Ogata Koan, a physician in the mid 19th century Japan is presented, including his contribution to start and spread smallpox vaccination and educating thousands of Japanese students, many of who later became great contributors to built modern Japanese state. He translated numerous medical books from Holland into Japanese, which greatly helped development of modern medical sciences in Japan. The founder of this journal, *Medicine and Biology*, Tomio Ogata, was one of his great grandsons.

Keywords: smallpox, Holland, Tomio Ogata, medicine

Corresponding Author:
E-mail: thiyama@athena.ocn.ne.jp